舌下部に発現した巨大な脂肪腫の一例

九州歯科大学第1口腔外科学教室（指導：山田長敬教授）

亀山 嘉光・豊嶋 健治・豊嶋 昭治・木村 卓生

九州歯科大学口腔病理学教室（指導：上野正康教授）

村上 俊明・下川 公一

（本論文の要旨は、昭和46年10月、第16回日本口腔外科学会総会において発表した）

A Case of the Large Lipoma in the Sublingual Region

By

Yoshimitsu Kameyama, Kenji Toyoshima, Shoji Toyoshima, Takuo Kimura

First Department of Oral Surgery (Director : Prof. Nagayoshi Yamada)

Toshiaki Murakami, Kouichi Shimokawa

Department of Oral Pathology (Director : Prof. Masayasu Ueno)

Kyushu Dental College; Kitakyushu, Japan

A lipoma is a soft tissue tumor consist of adipose tissue. However, although lipoma of the oral cavity are uncommon, the frequent location of the tumor are the cheek, the tongue, the lip and the floor of the mouth.

A case of large sublingual lipoma clinically suggestive of epidermoid cyst has been reported. The histo-pathologic feature seen in this tumor was lipoma.

緒 言

脂肪腫は、脂肪組織よりなる腫瘍で、全身の各所に発生する良性腫瘍である。口腔領域における発現は比較的まれとされているが、頬部、舌、口唇および舌下部には時折発生する。われわれは、今回、舌下部に発現した大なる脂肪腫の一例を経験したので報告する。

症 例

患者：江〇 〇ヨ，72才，女性。

初診：昭和46年4月1日。

主訴：舌下部の腫脹。

家族歴および既往病歴：特記事項なし。

現病歴：昭和36年春頃、口腔底舌下部の軽度の腫脹と異和感を自覚、その後、腫脹は徐々に増大するも全く無痛性に経過し、わずかに異和感があるも何らの障害もないため放置していた。昭和46年3月下旬、義歯不適合を主訴として某歯科を受診したところ、舌下部の腫脹を指摘され、当院口腔外科外来を紹介されて来院した。

現症：

全身所見：体格中等度、栄養状態は可で、貧血傾向も認められなかった。

局所所見：顔貌は、左右対称で顎下部の腫脹も認めず、とくに記載すべき事項を認めなかった。

口腔内は、開口障害もなく、舌下部に小鶏卵大の腫脹を認め、粘膜色は正常で、触知するに硬結はなく、極めて柔軟な弾性に富む嚢胞様物の存在を呈していた。また圧迫するも全く無痛性であった（写真1）。

写真1 口腔内所見

臨床検査所見：

血液所見

赤血球数： $756 \times 10^4 / \text{mm}^3$ 白血球数： $7 \times 10^3 / \text{mm}^3$

血色素量：87.5% (Sahli)

尿所見

尿 糖：(—)

尿 蛋 白：(—)

ウロビリノーゲン：(±)

E. C. G. : within normal limits.

臨床診断：舌下部の脂肪腫の疑い。

処置および経過：局所麻酔のもとに、口腔内より切開、摘出を行なった。創腔は一部開放創としタンポン交換を行なった。術後経過良好で、13日目に退院し、現在、術後4年を経過するも再発の傾向を認めない。

摘出物所見：大きさは、 $50 \times 40 \times 20 \text{mm}$ で、重さ15.8 gr、表面は平滑、帯黄色、被囊性の腫瘍で硬度は弾性軟、剖面は外層を薄い結合性被膜に包まれ充実性の脂肪組織であった(写真2)。

写真2 摘出物所見

写真3 摘出物全剖面所見

写真4 病理所見 (ズダンⅢ染色, 弱拡大)

写真5 病理所見 (ズダンⅢ染色, 強拡大)

病理組織学的所見：腫瘍は増殖した脂肪組織よりなり、線維性結合組織の被膜を有し、内部は被膜と連続した線維性結合組織の中隔によって分割され、分葉構造を呈していた。脂肪組織中の個々の脂肪細胞は脂肪を多量に摂取している成熟脂肪細胞が大部分を占めるが、ところどころに大小不同が認められる。これらの脂肪細胞はズダンⅢ染色で橙黄色に好染した(写真3～5)。

考 察

口腔領域における脂肪腫の発現は比較的まれではあるが、頬部、舌、口唇および舌下部などに見られる。

Shapiro (1969)¹⁾, Brooke (1969)²⁾, 朱雀 (1961)³⁾,

梶山 (1967)⁴⁾らの頬粘膜脂肪腫, Horton (1968)⁵⁾らの舌脂肪腫, 大井 (1963)⁶⁾, 岡本 (1963)⁷⁾らの口腔底脂肪腫などの報告がある。

脂肪腫が口腔底に発生した場合、類皮嚢胞と非常にまぎらわしい症状を呈する。大井 (1963)⁶⁾, 岡本 (1963)⁷⁾らも類皮嚢胞を疑って処置を行なった例を報告している。われわれが経験した症例は舌下部において、小鶏卵大に腫脹を来し、舌の挙上を認め、極めて弾性軟にてあたかも口腔底類皮嚢胞を思わせる症状を呈した。しかし、患者が高年齢であることと硬度が極めて弾性に富み、

柔らかいプワプワした感じであることより舌下部の脂肪腫を疑って摘出術を行なった。

舌下部における脂肪腫と類皮嚢胞の鑑別において、患者の年齢は重要な決め手と考えられる。すなわち類皮嚢胞の場合は若年者に多く、脂肪腫は成年以降に多いとされている。梶山 (1967)⁴⁾らの報告においても50代以後の例が著しく多いとされている。さらには、遠藤 (1968)⁸⁾が「その硬度と分葉観により」鑑別すべきだといっているように、その柔らかさが臨床的に診断の目安となる。その他、舌下部において鑑別を要するものにガマ腫があるが、これは穿刺を行なうことによって容易に鑑別し得る。また Panders (1967)⁹⁾は、軟性線維腫、先天性脂肪瘤なども鑑別が必要であり、多発性の柔らかい腫脹などがある場合は、Recklinghausen's disease も考えなければならないといっている。

脂肪腫の大きさについては、過去に報告されたもののなかには、320 gr もの大きなものがあることを Horton (1968)⁵⁾が報告している。われわれの症例も、50×40×20mmで重さ15.8grで過去の報告例に比べるとやや大きい部類であるといえる。

病理組織学的には、一般に、単純性脂肪腫と線維性脂肪腫に分類されているが、われわれの症例においては、線維性の中隔によって多数の脂肪細胞群に分割され、不規則な分葉構造を示し、線維成分の少ない単純性脂肪腫の像を呈していた。脂肪細胞は、大小不同のものは少なく成熟したものが多く、ズダンⅢ染色により脂肪滴が著明に証明された。

結 論

われわれは、72才、女性、舌下部類皮嚢胞を思わせた大なる脂肪腫の一症例を経験した。

稿を終るに臨み、終始御指導、御校閲を賜った山田長敬教授ならびに上野正康教授に深謝致します。

引 用 文 献

1. Shapiro, D. N. : Lipoma of the oral cavity, Oral Surgery, Oral Medicine and Oral Pathology 27 : 571—576, (1969) .
2. Brook, R. I. : Traumatic pseudolipoma of the buccal mucosa, Oral Surgery, Oral Medicine and Oral Pathology 28 : 223—225, (1969) .
3. 朱雀直道・他：頬粘膜下に発生した脂肪腫の2症例, 口科誌 16 : 499—504, (1967) .
4. 梶山 稔・他：脂肪腫の2例, 九州歯会誌 21 : 34—41, (1967) .
5. Horton, J. E. : Lipomas of the tongue, Oral Surgery, Oral Medicine and Oral Pathology 25 : 914—917, (1968) .
6. 大井一正：口腔底に発現した巨大な脂肪腫の1例, 歯科学報 63 : 362, (1963) .
7. 岡本 治：臨床診断において皮嚢胞と誤診した脂肪腫の1例, 歯科学報 63 : 749—750, (1963) .
8. 遠藤至六郎：口腔外科学通論及手術学, 458—475, 医学書房, 東京, (1963) .
9. Panders, A. K. : Oral lipoma, British Journal of Oral Surgery 5 : 33—41, (1967) .